九大広報

Kyushu University Campus Magazine

vol.51
2007.5

九大至宝
九州大学
中央図書館蔵
竹とり物語



インタビュー・シリーズ九大人

古川貞二郎さん 元内閣官房副長官

吉田 隆さん (株)エヌ・ティー・エス 代表取締役社長

玉 羽さん 長崎検番・芸妓

モノが伝える歴史と未来

Kyushu University Great Treasure VOL.1

九大至宝



竹とり物語

九州大学中央図書館蔵

上下二巻二帖　大本（二十四、二×十八㎝）綴帖

支子文庫本。近世中期写。奈良絵本。

花鳥文様の金襴緞子藍地表紙左肩に下巻のみ「竹とり物語下」（題簽）と外題を記す。本文と同筆の原題簽。上巻は剥落した跡がある。内題「たけとり物語上（下）」。

見返しは金泥布目文様。紙数は順に三十丁・二十六丁で、内墨付二十八丁・二十四丁。共に巻末のみ遊紙二丁あり。本文料紙鳥の子。一面十行。

本文は流布本の正保版本系。挿絵は上巻に七面、下巻に六面存し、巻末の余白は本文を散らし書きにする工夫が見られる。奈良絵本の体裁は一般に、横本仕立てのものと、本書のような縦本の大型本があるが、後者の方が比較的古い形である。本書の挿絵の、金銀の箔や砂子をふんだんに用いた豪華さ、襖絵や衣服の文様・顔の表情など細部まで描く巧みさ、鮮やかな色彩は、本書を奈良絵本として優れたものとしている。

この挿絵は、求婚者たちが、かぐや姫を訪ねてきたシーンを描いている。

九大広報

Kyushu University Campus Magazine

vol.51

2007.5

編集発行　九州大学広報専門委員会
事　務　九州大学総務部広報室
住　所　〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
電　話　092-642-2106
F A X　092-642-2113
E-mail　koho@jimu.kyushu-u.ac.jp
U R L　http://www.kyushu-u.ac.jp
印　刷　アイメディア株式会社



CONTENTS　目次

インタビュー・シリーズ九大人
元内閣官房副長官
古川 貞二郎さん……3
(株)エヌ・ティー・エス代表取締役社長
吉田 隆さん……9

ニュース
□国際的視野を持つリーダーに。四、八二一名卒業……15
□戦略的広報・交流の拠点
「九州大学・芸術工学東京サイト」G-PARNを設置……15
□第3回SIA-DAY
「高樹のぶ子と浸る台湾！循環する生命」開催……17
□平成十八年度九州大学職員海外研修プログラム
(アテネオ・デ・マニラ大学)……18
□ネットアカデミー2のすすめ……19
□情報統括本部の看板除幕式を挙行……19
□厳かに平成十九年度入学式……20
□表敬訪問……20

海外オフィス便り
□在中国九州大学同窓会だより……21

シリーズ研究・ふろんとランナー
比較社会文化研究院准教授
溝口 孝司氏……23

インタビュー・シリーズ九大人
長崎検番の新人芸妓
玉羽さん……29

お知らせ
□新シンボルロゴ／UIマニュアル……35

告知板
□九州大学応用力学研究所
RIAMフォーラム2007……37
□セクシュアル・ハラスメント
相談……38

新聞で報道された九州大学
□2月～3月……39

九大生が案内する世界のキャンパス
□東国大学校(韓国・ソウル)……41

こんな本出しました
□九大アジア叢書-7
昆虫たちのアジア……42

編集後記
□入江編集主幹、渡辺編集委員、
松本広報部長……42

□お読みになってのご感想やご意見をお待ちしています。
□投稿をお受けします。文字数は、300字未満。手書きのものも受け付けますが、できればテキストファイルのフロッピーディスク又はEメールでお送りください。可能な限り掲載しますが、本誌の目的や性格に照らして不適当と思われる原稿は掲載しません。
■九州大学関係者が本誌記事を転載する場合は、「九大広報第○号から」と明記してください。学外の方は、事前に事務までご連絡願います。
■「九大広報」は九州大学ホームページでもお読みいただくことができます。
■次号は、2007年7月発行予定です。

九大人が伝える

進化する文化遺伝子

シリーズ九大人インタビュー

［聞き手］柴田 洋三郎［九州大学　副学長］

古川貞二郎

ふるかわていじろう

元内閣官房副長官



平成五年に厚生省事務次官、同七年二月に村山富一首相（当時）から要請されて官僚機構のトップである内閣官房副長官に就任。以降内閣官房副長官として八年七ヵ月という最長在籍記録も保持する古川貞二郎さん。同十八年度の卒業式に学生たちの大先輩としてご列席いただき、はなむけの言葉を贈っていただきました。その篤実なお人柄と豊かな経験からにじみでる言葉は、これから人生の航海に乗り出す学生たちへの生きたエールになったことでしょう。卒業式のあと、春の陽光が降り注ぐ事務局の窓辺でインタビューが行われました。



卒業式で祝辞を述べる古川氏（平成19年3月26日）

古川貞二郎

昭和33年、九州大学法学部卒業。長崎県庁総務部を経て、厚生省に入省し、平成５年に厚生省事務次官、平成７年２月に内閣官房副長官に就任し、官僚機構のトップとして、村山、橋本、小渕、森、小泉の５つの内閣を支える。

人生に回り道というものはありません

―今日は九州大学の卒業式にご列席いただき、ありがとうございました。

古川　私自身が感激しました。じつは私は自分の卒業式には出ていないんです。就職活動か何かが重なったんでしょうね。こうして初めて九州大学の卒業式に出たわけですが、厳粛ななかに穏やかな空気が満ち、また、女子学生もたくさんいて華やかさも加わり、まさに門出にふさわしいと感じ入りました。

―先生のお話は本学を巣立ち、それぞれの道を目指していく学生たちに貴重なはなむけの言葉になったと思います。

古川　贈りたい言葉はたくさんあるのですけれど、時間に限りもあり、二つの言葉に集約することにしました。「決してあきらめない」ということ、「人の痛みがわかる人間であり続ける」ということです。これは僕なりに豊かな人生を目指すうえで信条としてきたものです。学生の皆さんのどこか心の隅に少しでも残していただければ、幸せのお手伝いができるんじゃないかなという願いを込めました。

―まず、「決してあきらめない」という言葉ですが、これは登竜門である国家公務員試験にまつわる先生自身の挫折の顛末から生まれているのですね。

古川　私は大学四年生のときにあまり準備もしないまま、国家試験を受けて失敗。当時、就職難だったこともあり、企業の試験も失敗しました。そんな自分を深く反省しつつ、長崎県の上級職試験を受験。県職員として働きながら、厚生省の試験にチャレンジした経緯があります。ところが、県庁でぎりぎりまで仕事をして受験のために上京しようとしたら、伊勢湾台風にぶつかってしまって。結局三十六時間かかって東京に到着し、漸うの思いで試験を受けたら、またもや不合格の憂き目に会うので



語り合う柴田副学長（左）と古川氏

す。でも、成績はそう悪くはなかったこともあって、私は「このままでは帰らないぞ」と腹を決めました。

―人事課長に談判に行かれたのですね。

古川　厚生行政への熱意を強く訴えると、「厚生省は君のような熱意のある人間がほしい」という。「では、採ってください」「いや、もう決まった」のやり取りが続き、最終的に「長崎県にしばらく帰っていてくれ。その間に努力するから」といわれました。でも、帰ったら不合格の連絡が来るに違いないと思い、私はなおも粘った。「帰らない」と言い切りました。

―まさに「あきらめない」ですね。

古川　その席を立つとき、人事課長はこんなことまで言われました。「努力はするけれども、万一、期待に添えなかったら変なことになるまいな」と。「自殺するというような意味でおっしゃっているのなら全く心配いりません。そのときはまた来年試験を受けにきますが、正直、仕事をしながらの受験で通るかどうかわかりません。できれば今回採用してほしい」と私は答えました。そして、その日の夕方に内定の連絡を受けたのです。

―先生のその後のご活躍に思いを馳せるにつけ、あきらめないということをエネルギーにすることによって、挫折が大きなプラスになることがよくわかります。

人の心の痛みのわかる人であり続ける

―厚生行政で自分を活かしたいと考えるようになったきっかけは何だったのですか？

古川　私は父が四十五歳、母が四十二歳になろうとするときに生まれた農家のひとり息子です。物心ついた時分には両親はもう高齢で、年老いてからの農作業は子どもの目にも過酷に見えました。そんな両親の姿を見て、若い頃に苦労した人は晩年には幸せな生活を送れる世の中にしたい、その仕事ができるのは厚生省（現・厚生労働省）だと考えたのが動機です。

―その厚生行政に携わってこられて、底流に流れているのが二番目のはなむけの言葉である「人の痛みがわかる人間であり続ける」ということですね。

古川　これはもう私の身についたもので、生涯身から離れないと思います。人の心がわからないで、あるいは人の心の痛みを感じることができないで「いい仕事」ができるわけはありません。社会的に成功して称揚されても地に落ちる人たちがいっぱいいます。これは人の心の痛みがわかっていないから。また、「あり続ける」ということも肝心な部分です。だんだん人生に回り道はないというように思います。受験失敗も、県庁に勤めたのも回り道のようですが、この時代に地方から中央省庁の人たちを見るという経験をしました。行政官になっても、その意識を担保しているわけですね。バランスの取れた行政を追求する意味でも非常にプラスになったと感じています。



経験を積んだり、成功したりしてきますと、自分ひとりの力でそうなったように思ったり、考えが自分中心になってきがちでしょう。

―いい仕事とは人の心の痛みを知っている人にこそ出せる成果なんですね。

古川　私の両親というのは当時でいう浮浪者の人たちにおにぎりを与えたりするような人たちでした。誰が偉いというのではなく、人は支えたり、支えられたりしながら生きているのです。そうした人としての原点をもち合わせないで、本当に豊かな人生というのはありえないと思います。

「いい仕事」には、さわやかな充実感がある。

―「いい仕事」と聞いて思い出すのが、ハンセン病の控訴問題でも先生は行政官の立場から大きな貢献をされています。

古川　ハンセン病の元患者さんは当時平均七十六歳、今は八十一、二歳でしょうか。先の裁判で国が控訴を断念して賠償金が出ることになると、普通だったら親類縁者まで大挙して手を挙げてくるんです。けれどもハンセン病の場合、誰もいません。ハンセン病の元患者さんたちは親子、兄弟、身内との縁を切ってしまっているからです。本当にお気の毒としかいいようのないことです。どんなことをしてももうその方の人生は取り返しがつかないんだけれども、できるかぎりのことで償いたいというのが、人の心の痛みがわかるということでしょう。

―熊本地裁は、ハンセン病患者の置かれた立場を何とかしようとした。それに対して国が控訴するか、断念するかという点に注目が集まりました。

古川　元患者さんに何とかしてあげたいという気持ちは誰しもあります。しかし、行政には筋があり、単純に感情的、情緒的な判断というわけにはまいりません。ハンセン病だけではない他の国家補償のいろいろな問題もあります。ハンセン病の問題で難しかったのは、ライ予防法という法律を改正して早く隔離政策から解き放つべきだったのにしなかった国会議員の不作為も問われていた点です。

―国が容認できなかったのは、ここでしたね。

古川　ただ、ハンセン病患者の置かれた立場を何とかしようとした熊本地裁の判決自体は支持すべきものでした。そこで、私たちはこんな知恵を出したのです。法的拘束力はないけれども、「政府声明」という強力な行政の手法をつかってはどうか、と。法的に問題のあるところは「この点はおかしい」ということを明確にした上で人道的趣旨から控訴断念にもっていこうと考えたのです。

―政府声明にはそうした力があるのですか。

古川　政府声明の一段階手前に「内閣総理大臣談話」があります。内閣の意志表示にはいろいろありますが、内閣総理大臣談話は重要な局面で閣議決定に基づいて出す

いわば内閣を代表する声です。「政府声明」はさらにそれより強い効果をもつもので、今までも沖縄返還や大学紛争のときなど何回かしか出されていません。ある意味、たいへん強い政府の意思が表れたものです。

― 我々国民も何とかならないかなと祈っていたところを、ああいう形で見事に解決していただいて、本当にありがたく思いました。

古川 私自身、とてもさわやかな充実感を感じた仕事です。小泉総理にも非常に喜ばれました。ところで、この問題は総理がエイヤっと強い指導力で控訴断念を決断したという論調で報じられています。しかし、これは必ずしも正しくありません。正確には政と官が互いに知恵を出し合いながら、小泉総理の強い思いを形にして、控訴断念に持ち込んだ好例というべきでしょう。

待望される次代のリーダーシップ

― 内閣官房副長官として最長の在籍記録をおもちになり、五代の総理を補佐されてきたわけですが、リーダーシップということについてお感じになっておられることをお聞かせください。

古川 トップダウンがリーダー像の一つとしてありますが、このトップダウン方式には絶対的な条件がございまして、しっかりした補佐体制があって初めて、リーダーがよいリーダーになると思うんですね。でなければ、思いつきとか、裸の王様になってしまいます。また、ボトムアップというリーダーぶりもあるのですが、これも条件があって風通しがいいことが必須です。たとえば、総理は配下の人間は何を考えているか、また配下の人間は総理が何を考えておられるかということを、常に意識しながら仕事をする。リーダーというと何か指示したり、指図をしたりする人をいいがちですが、これは半分は間違いで、ボトムアップ方式もリーダーシップです。どちらにしろ、リーダーシップをとるためには、みんなの信頼を得なければなりません。何より公平公正でなければならないのですが、そのためには我欲を抑えることです。人間は欲望をもっています。私にももちろんあります。が、欲望をできるだけ抑えることで公平公正になれる。それが信頼につながるのです。さらに、その努力が国家とか国民、つまり自分以外のものを念頭においてなされ、また、口に出した以上は実現していくという態度がリーダーには求められると考えます。

― あきらめない、逃げないということですね。

古川 逃げないということも本当に大事なことだと思いますね。頭がいいゆえに、実行するデメリットを理論立て、やるべきではないといいだすリーダーもいます。しかし、その人の心の底の底を叩いてみると、これをやれば成果が上がるかもしれないけど、非常に苦労もするし、失敗するかもしれない。「やりたくない」が、いつしか「やるべきじゃない」にすり替わっていくパターンです。決心したらどうやってやるかという知恵や工夫が出てくる。逃げない。逃げなければ道は必ず開ける。私自身はいろんな経験のなかから早い段階でその確信を身につけることができました。その姿勢は評価されたんじゃないかなと思っています。

― 余談になりますが、先生は厚生労働省の三十九代目の次官でいらっしゃいますが、それまでの三十八人は全員東京大学出身だそうですね。

古川 別に閥があるわけではないのですが、みんな私のことを東京大学出身だと思っているんです（笑）。そのたびに「九州大学です」と訂正しています。私は九州で生まれたこと、九州大学卒業であることに誇りをもっていますので。

― 今日卒業式を迎えた彼らも世の中に出て行くわけですが、本学の学生は少々引っ込み思案の気がある。もうちょっと自信をもって

積極的に出て行ってくれればなあという声があるのですけれども。

古川　私自身もたぶん学生時代はかなり引っ込み思案であったと思うのです。でも、社会に出てどんなことがあっても頑張る、難しい仕事でも頑張るという気持ちをもち続けました。九州大学を巣立つみなさんも、世の中の仕事、あるいは生き方について積極的に挑戦する、自己主張ではないのだけれども、自分の存在をちゃんと主張しながら自信をもってやっていくことは大切なことだと感じます。

―最後に九州大学の後輩、九州大学を志す高校生にぜひメッセージをいただきたいと思います。

古川　私自身が愚直、誠実に一生懸命ものごとに取り組むことを信条にしている人間ですが、やや愚直で、かつまた潜在的な能力の高い九州大学出身の人材を私はたくさん知っています。愚直は純朴、質実、素朴という意味にもつながり、非常にいいことだと思うのです。でも、それはなかなか表に出しにくいものであるという恨みも確かにあります。だからこそ、社会的なさまざまなことに、もっと積極的に取り組む、挑戦するという姿勢がプラスされると、いいのではないでしょうか。みなさん、潜在能力は非常に高いのですからね。それが自分を活かしきるということだと思います。



あきらめないこと。
人の痛みがわかる人間であり続けること。
よい仕事をし、豊かな人生を生ききるために、
皆さんに伝えたい私の信条です。

進化する文化遺伝子
シリーズ九大人インタビュー

吉田隆

株式会社エヌ・ティー・エス　代表取締役社長
よしだたかし



吉田さんはユニークな出版ビジネスを展開する「先駆者」として雑誌『フォーブス』日本版（二〇〇七年三月号）に登場するなど注目される出版人です。また、九州大学百周年記念事業の役員もお引き受けいただいています。来学の折にお話を伺いました。



皇居一周駅伝大会にて

吉田 隆

1969年、長崎東高卒業。1974年、九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒業。1978年、（株）フジ・テクノシステム入社。1985年、（株）エヌ・ティー・エスを設立し現在に至る。2005年より武蔵野美術大学非常勤講師。

出会いから生まれたユニークな仕事

―吉田さんは長崎のご出身で、芸術工学部の前身である九州芸術工科大学（以下「芸工大」）の工業設計学科のご卒業です。まず、芸工大を志望された動機からお聞かせください。

吉田 長崎東高校の生徒であった頃から芸術には興味を持っていたのですが、三年生になって先生から「こんな大学ができたぞ」と芸工大のことを教えてもらいました。その理念である「デザイン」「芸術工学」という言葉は、当時の高校生には新鮮な響きがあって、それで受験を決めました。

―当時の芸工大はどんな所でしたか。

吉田 私は二回生なのですが、受験のときは、敷地から移転した福岡教育大学の建物が壊されて芸工大の建物が建ち始めた頃で、がらんとして「寂しいところだな」と感じたのを覚えています。大学周辺も同様でした。久しぶりに芸術工学部になった母校を訪ねて見ると、大学も含めたあの界隈が全くの別世界になっているので本当に驚きました。当時は、誕生したばかりの大学に夢を持って全国からやってきた、芸術やデザインに興味のある多士済々の学生の熱気が交差し、先生方にも新しい領域を切り拓くフロンティア精神のようなものが感じられました。

―卒業して上京され、いろいろな経験をされたとか。ボクシングもされたそうですね。

吉田 工業設計学科は、例えば将来、自動車とか電気製品とか、企業の研究所などで工業製品のデザインをしたいという希望を持つ人たちが行く所です。しかし、私は「東京に行きたい」という気持ちを優先して、大学での勉強とは直接関係ない会社に就職しました。その後、紆余曲折を経て出版社に勤めたときに、社長からユニークな仕事のやり方を習い、それを応



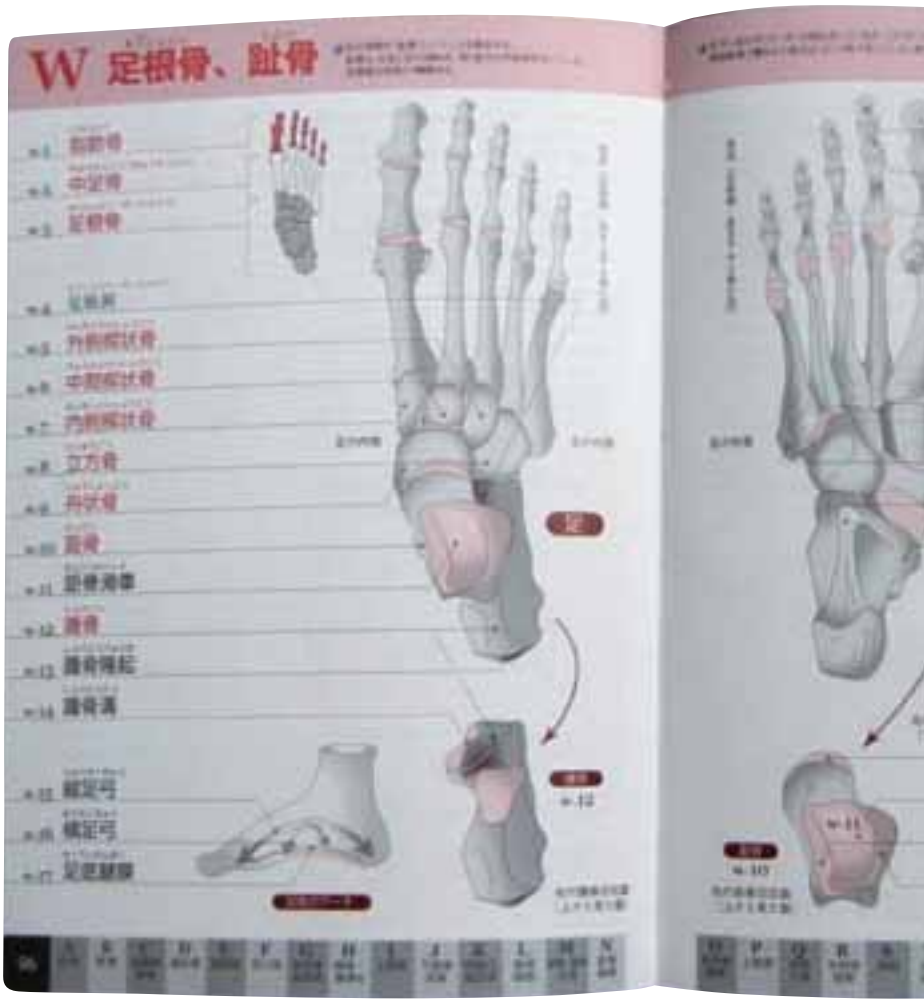
大事なのは強い気持ちを「声」にして相手へ届ける力。

用発展させたのが今の仕事です。

ボクシングは、二十六才から十年間やりました。もともと走ることや運動が好きで、中学高校時代は陸上部、就職してからはサッカー、今は会社の人たちと皇居一周駅伝大会を楽しんでいます。ボクシングも、何か一人でできるスポーツをしたいと思っていたところ、たまたま近所にジムがあったから始めたのです。

―　現在、出版社としてかなりユニークな手法でお仕事をしていらっしゃいます。出版していらっしゃる本も、ほとんどは専門性の高いもののようですが。

吉田　会社名のＮＴＳは、New Technology, New Scienceの略です。科学技術の或る分野の知識を体系化して一冊にまとめようとします



ので、執筆者が二百人、全体で一千ページといった本になることもあります。それを、試読システムという方法で販売しています。一口で言えば、店頭に並べてお客さんを待つのではなく、自分たちでお客さんを捜すやり方です。

―　試し読みができるのですか。

吉田　スタッフが、その分野の研究者など本に興味をもってくれそうな方々に電話をして、関心を示していただけたら本をお送りして試読していただき、よければ買っていただくというシステムです。百人くらいの方に電話をおかけしたとして、本をお送りできるのが二十五人か三十人、買っていただけるのが三、四人くらいの割合です。返本された書籍は再び試読にあてることができます。店頭においても、いい本は多くの人が手にとって見ることと同様です。このやり方で、不況の出版業界でも何とか生き残ることができています。

―　しかし、新しいやり方で事業を始めるというのは、ご苦労も多

く、勇気の要ることと推測しますが。

吉田　出版業の苦労は共通で、いかにヒット商品を生み出すかにあります。勇気という点では、千ページクラスの本を出すとなると数千万円かかる上に、営業コスト分まで考えると、外れるのは怖い。発行するかどうかは、編集部と営業部のスタッフが話合って決めています。その上で、必要ならば私が最終的に決断します。

―電話で説明して試読してもらうというのは難しいお仕事のように思われます。電話はどんな方々が何人くらいで担当されているのでしょうか。

吉田　会社のスタッフは九十人弱で、そのうち電話営業を担当するのが三十人から四十人です。本の内容に詳しいにこしたことはないのですが、それよりも大事なのは営業マインド、「いい本だからぜひ読んでいただきたい」という強い気持ち、そういう気持ちを「声」にして電話を受ける側に届ける力のあることです。

企画も同様で、要は気持ちの問題なのです。理工系の図書を作るのだからその分野の専門知識がないとできない、というわけではない。むしろ、ジャーナリスティックな目で科学技術を見ることのできる人。その技術がどう役に立つか、その技術が実現したら暮らしはどう変わるか、そういう関心が強い人ほどいい仕事ができます。科学技術のユーザーの視点が大事なのです。そういう現場志向型の出版人がとても少ないことを感じます。

―この『骨単（ホネタン）』は、医学生など専門家を相手に出版されているのでしょうが、私のような素人が読んでも面白い。NTSの販売手法もユニークなら、企画もユニークである訳が、今のお話で分かったように思います。

吉田　『骨単』は我々も予期せぬ方々に読んでいただいています。詩人から「派生語の多様さに圧倒された」、小説家より「お洒落なプレゼントに最適」などの書評を頂戴していますし、女子高校生がアンケートに「友達と共通の話題ができた」と書いてくれたりしています。



専門だけでなく広く知識を持つことの大切さ



在京の仲間は年に数回、時には当時の教官を囲んで飲み会や勉強会で集う。写真は工業設計学科２回生・３回生による「阿部年晴先生（造形論・前列右から２人目）を囲む会（本年３月）」にて。

企画に賛同して執筆してくださる著者の先生方には、本当にお世話になっています。特に九州大学の先生方は執筆陣に不可欠な存在で、梶山総長はじめ多くの先生方に十年以上のお付き合いをいただいていますし、分野も農学系、医学系などへ広がりつつあります。おかげで九州へ帰郷する機会も増えて楽しみでもあります。

―　いろいろな経験を重ねて、独特のやり方で成果をあげていらっしゃる今、後輩たちへメッセージをお願いします。

吉田　よく感じるのは、専門だけでなく広く知識を持つことの大切さです。いろいろな人と価値観を共有できる多様性を持つことにもつながります。他の人たちの価値観を認め、それを受け入れることのできる人でなければ、多くの人を束ねていけるリーダーにはなれない。それは一言で言えばバランス感覚、様々な人たちの価値観を受け入れる懐の深さです。リーダーでなければ、自分のアイデアやビジョンを組織で生かしていくのは難しい。後輩たちには、組織のリーダーをめざしてほしい。

また、会社で仕事をしていく上でもう一つ大事なのは、会社のグランドデザインを理解した上で仕事をすること。会社の特徴、どのような理念で成り立っているかという核の部分。これが分かると会社が見えてきますし、その中で自分を生かすことができるようになります。逆に知らないと、やみくもに自分だけ突っ走ることにもなりかねません。

―　最後に、母校である芸工大について、また芸術工学部と九州大学のこれからについて、お感じになることをお聞かせください。

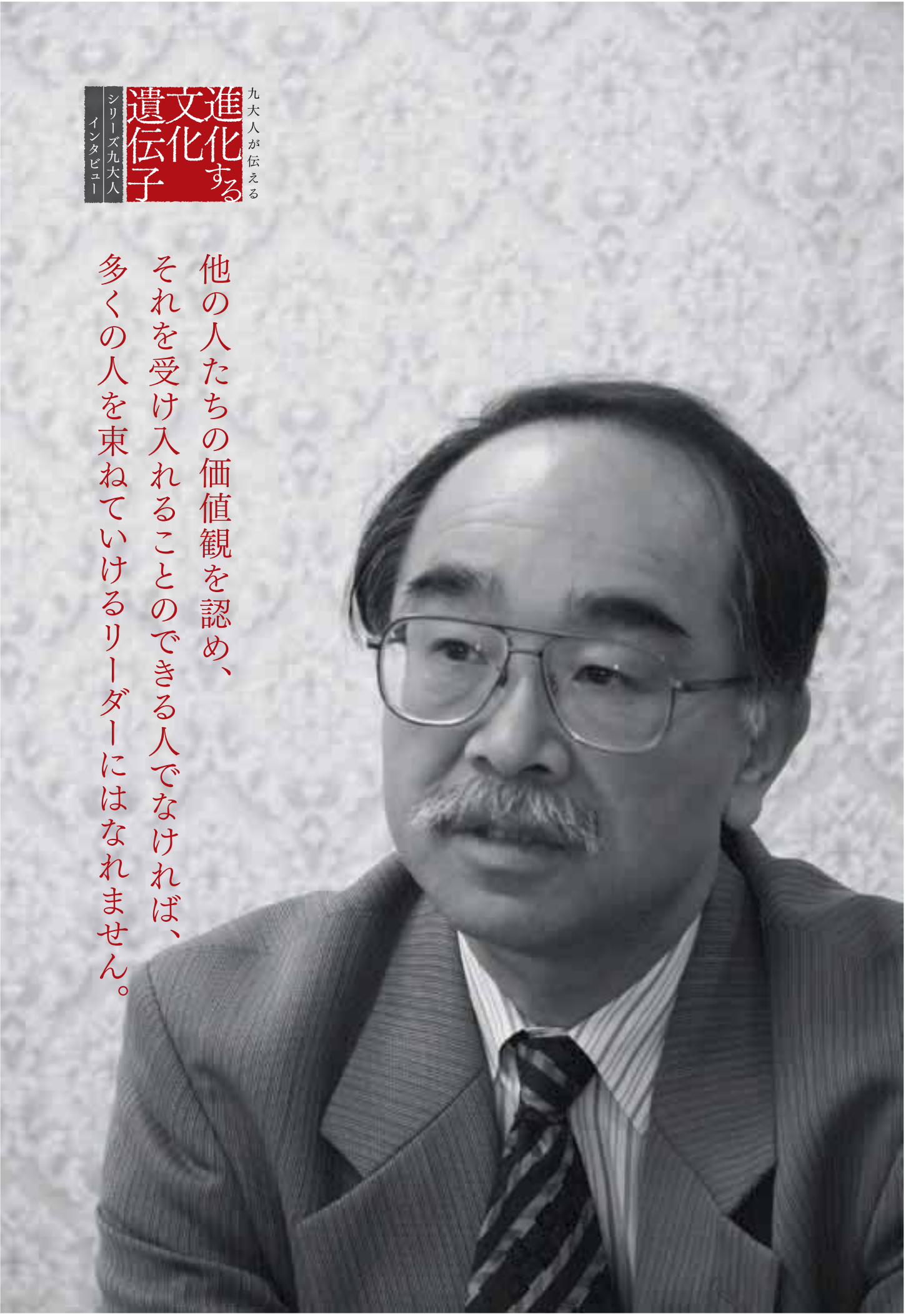
吉田　芸工大で学んで本当によかったと思っています。今も年に数回は東京にいる友人たちが集まり、時には恩師をまじえて、情報を交換したりしています。友人たちの支えは、私にとって大きいものがあります。

今、振りかえれば芸工大の教育もよかった。小池新二初代学長は「人間性を伴う科学」を謳っておられて、科学技術を社会に生かすためには芸術的感性が介在する必要があり、両者の融合の形こそがデザインであるという理念に基づいた教育が行われました。当時、最先端の大脳生理学の原書を読まされたことが今も記憶にあります。また、L・マンフォードの『芸術と科学』を副読本に選ぶなど、当時の時代背景を踏まえていたとはいえ、結果として二十一世紀を先取りする教育が行われていたことに感慨を覚えます。芸術の感性は、今後の科学の振興に不可欠です。例えば環境問題なども、芸術と科学が連携して一歩踏み込める部分もあると思います。九州大学の伝統ある先進性にそういう芸工大の理念が融合すると、時代に即した新しい大学が生まれるような気がします。

九大人が伝える

進化する文化遺伝子

シリーズ九大人インタビュー



他の人たちの価値観を認め、
それを受け入れることのできる人でなければ、
多くの人を束ねていけるリーダーにはなれません。

国際的視野を持つリーダーに。四、八二一名卒業



平成十九年三月二十六日（月）、平成十八年度学位記授与式が、箱崎キャンパスの創立五十周年記念講堂で挙行され、以下の者に学位記が授与されました。

学士	二、五九七名（八四三）
修士	一、六九五名（四三四）
専門職	一七〇名（七八）
博士	三五九名（七一）

（　）は女子学生で内数。

午前に行われた学士学位記授与式では、総長告辞に続いて、社会福祉法人恩賜財団母子愛育会理事長（元内閣官房副長官）で法学部OBの古川貞二郎（ふるかわ・ていじろう）氏が来賓祝辞を、文学部の斎藤彩世（さいとう・さよ）さんが学士総代として答辞を述べました。

午後に行われた修士・専門職・博士学位記授与式では、総長告辞に続いて、ソウル大学校の李長茂（Lee Jang-Moo イ・ジャンム）総長が来賓祝辞を述べました。





祝辞を述べるソウル大学校の李長茂総長

戦略的広報・交流の拠点「九州大学・芸術工学東京サイト」（GIPARN）を設置

芸術工学研究院（安河内朗研究院長）は、首都圏において戦略的なプログラムに基づく広報及び交流活動を積極的に展開するため、平成十九年三月三十日（金）の東京ミッドタウン・グランドオープンにあわせて、東京ミッドタウン（東京都港区赤坂九―七―一）内に「九州大学・芸術工学東京サイト」（愛称：GIPARN（ジー・パーン）、床面積：一五〇㎡）を開設しました。

GIPARNは、ミッドタウンタワー五階にあり、（財）日本産業デザイン振興会、（社）日本グラフィックデザイナー協会とともに運営する「東京ミッドタウン・デザインハブ」内で活動を展開します。

今後は、松下電工（株）との共催による、開設基調セミナー「光環境で考える～働く人のための正しい一日の過ごし方～」をはじめ、「デザイン人間科学」、「コミュニケーションデザイン科学」、「創遺産」、「コンテンツ・クリエーティブデザイン」及び「デザインストラテジー」の五つの先端的かつ高次のデザインをテーマに様々な活動を行う予定です。







学士学位記授与式における梶山千里総長告辞 要旨



リーダーの意識を持って社会に貢献することも人間としての価値表現の一つ。そのために、創造性を身につけるための日頃の訓練と、異文化を認め理解する国際的視野の涵養が必要です。皆さん一人一人の努力の積み重ねとリーダーシップの発揮が、真に豊かな日本、世界を実現させると信じています。

古川貞二郎氏の来賓祝辞 要旨



逃げず、回避を理屈で正当化せず、実現の努力をすれば道は開けます。人の痛みの分かる人間であり続けること。そうでなければいい仕事はできず、いい人生を生きることはできません。志高く、自分以外の人のために何を為すか、どんな努力をするかを評価の基準としてください。皆さんが背筋を伸ばして前向きに堂々と歩んでくれれば、先輩としてこんなに嬉しいことはありません。

学士総代 斎藤彩世さん（さいとう・さよ 文学部）の答辞 要旨



四年間を通してじっくり自分について考え、他人の生き方を見つめて、人生を生きていくための知恵を授かったように思います。自分をみつめることで自らを向上させることができ、他人を見つめることでその人を理解し、思いやりを持った目で見、空しい衝突を回避することができます。四年間で学んだことを生かすことで、様々な困難を克服し、平和な新しい時代を築いていくことができると確信します。

式が終わって講堂を出た卒業生たちは、咲き始めた桜の木の下、後輩や家族・関係者の祝福を受けていました。

G-PARN



G-PARN正面入口



記者発表

第3回SIA-DAY
「高樹のぶ子と浸る台湾！循環する生命（いのち）」開催



SIA（Soaked in Asia）とは九州大学アジア総合政策センター特任教授で芥川賞作家の高樹のぶ子氏のプロジェクトで、「五感でアジアに触れる」ことを主旨として、アジアの文学者と言葉のキャッチボールを行うというものです。

平成十九年三月十七日（土）、SIAの第三回目がアクロス福岡・円形ホールで開催されました。今回の対談の舞台とかかわりがある蘭と流木で演出された会場には、参加者一七〇名の熱気が溢れ、独特の空間を生み出していました。

今回のテーマは「循環する生命（いのち）」と題して、台湾のタオ族の作家シャマン・ラポガン氏との対談映像や、シャマン氏が暮らす離島、蘭嶼島（ランユィ）での生活を中心に構成されました。高樹氏のタオ族の民謡を交えたレクチャーや台湾で感じたことを写真とエッセイで表現したフォトデッセイ三篇の朗読、海に生きるタオ族の世界観を見事に凝縮したシャマンさんの短編小説『天使の父親』と、それに呼応する形で書かれた、高樹氏の実体験に基づいた書き下ろし作品『四時五分の天気図』などが朗読されました。休憩時間には台湾のおやつ発餅（ホワッグエー）や山査子餅が振舞われました。



参加者からのアンケートには、「朗読がとても上手で、すうっとエッセイの中に入り込み、タオ族の老人がつくるさつまいもを食べたような気分になりました」、「文明とは、知識とは、ということを考えさられました」、「小説で何かを発信してゆくパワーの大きさと大事さを認識した」等の感想が寄せられました。

二つの短編小説は文芸誌『新潮』（四月号）に掲載されています。

※平成十九年度から、SIAは大学院「共通教育科目」の一つとして授業に組み込まれています。



台湾の作家シャマン・ラポガン氏（左）と高樹のぶ子氏

平成十八年度九州大学職員海外研修プログラム（アテネオ・デ・マニラ大学）

医系学部等事務部（附属図書館医学分館）　兵藤健志





平成十九年一月八日から三月二日までの約二ヶ月間、フィリピンの名門私立アテネオ・デ・マニラ大学で職員研修を受けました。

初めの七週間は、英語研修として、同大学内の語学センターで英語習得プログラムを受講しました。このプログラムにはおよそ二十五名の受講生が参加しており、その出身地は韓国・中国・日本・マレーシア・インドネシア・ベトナムなどアジアを中心として九カ国にわたって国際色豊かでした。言語・文化・家族・教育などをテーマに、各国の受講生とディスカッションやスピーチを行い、語学力の向上だけでなく、お互いの文化への理解を深めることができました。

最後の一週間は、実務研修として、同大学の図書館で情報交換および職場体験を行いました。実際の業務にあたふたと戸惑いながらも、楽しくてあっという間に時間が過ぎてしまいました。フィリピンにおいて図書館の職員は、専門職として法的に保障された国家資格を持っています。さらにそれだけでなく、修士号を取得するために働きながら大学院へ通うなど、常に自己研鑽を続けています。また、データベースなどの製品を独自に生産して海外へ販売するなど、積極的な取り組みには見習う部分が多くありました。

他にも、アテネオ・デ・マニラ大学で印象に残っているのは活発な学生の姿です。美しいキャンパスでのびのびと躍動する姿は本当に楽しそうでした。休日には、学生サークルに参加して小旅行へ出かけましたが、みなフレンドリーですぐに馴染むことができました。九州大学の学生のみなさんにも、アテネオ・デ・マニラ大学を留学先としてぜひお勧めします。きっと充実したときが過ごせるはずです。



最後に、この貴重な訪問の機会を与えて下さった皆様へお礼を申し上げます。アテネオ・デ・マニラ大学と同様に、九州大学でも多くの学生の笑顔に出会えるように、熱意をもって日々精進していきたいと思います。どうもありがとうございました。

九州大学職員海外研修プログラム（アテネオ・デ・マニラ大学）は、本学の職員に海外の大学における英語訓練の機会を提供するとともに、協定校の事務の現場を実地に体験しながら、事務担当者と交流することにより、大学職員として必要な実践的な英語能力の向上と業務遂行に資する国際感覚を養成することを目的としています。平成十九年度プログラムの詳細は国際交流推進室（092-642-2143）へお問合せください。

ネットアカデミー2のすすめ

ウェブ英語学習システムのネットアカデミーが平成十九年三月に更新され、学外からの利用、携帯での利用（単語訓練のみ）が可能になりました。新TOEICへの対応、クラス運営機能の充実等、多くの改良がはかられています。

スタンダードコース、初中級コースプラス、技術英語、医学英語の四コースがあり、読解、リスニング、語彙等が勉強できます。全国約三百の大学で導入されており、他学に負けないよう、大いに利用してください。

今年度医学府で正規授業として利用されるのを皮切りに、今後医学部の授業、歯学部、歯学府や農学府での教育にも利用が検討されています。

（文責：言語文化研究院准教授　鈴木右文）





詳細は http://gogaku.kyushu-u.ac.jp

情報統括本部の看板除幕式を挙行

平成十九年四月一日付で設置した「情報統括本部」の看板除幕式を四月三日（火）に挙行しました。

同本部（本部長・村上和彰総長特別補佐）は、情報基盤研究開発センター、事務局情報システム部及び情報環境整備推進室で構成され、全学的な情報基盤の整備並びに情報技術を用いた教育研究及び大学運営に関わる業務の総合的な支援を行うことを目的として設置されたものです。

除幕式では、梶山総長から「同本部が機能を十分発揮して目的達成に向けて積極的に取り組んでもらいたい。」との挨拶の後、村上本部長から「教員と職員が一体となって全学の情報基盤整備と全学のIT支援を進めていきたい。」と今後の抱負を述べ、その後看板の除幕が行われました。



看板の前で（左から）早田理事（事務局長）、村上本部長、有川理事（副学長）、梶山総長

厳かに平成十九年度入学式





祝辞を述べるWebley学長

平成十九年四月五日（木）、平成十九年度の九州大学入学式が福岡国際センターにおいて挙行されました。

梶山総長が「自ら進んで社会から学び取れる学生に」と題して告辞を述べました。その後、新入生二、六八七名の代表として歯学部・羽野和宏さんが「私達は本学教育の趣旨を体して自立の精神を重んじ学術を極めると共に自ら人格の陶冶につとめ社会の期待にそうことを誓います」と入学にあたっての誓詞を朗読しました。

今年度は、九州大学と平成十八年十一月に学術交流協定を締結したロンドン大学アジア・アフリカ学院のPaul Webley学長が来賓として出席し、新入生に対して祝辞を述べ、また来賓として招かれた本学卒業後三十年の節目に当たる同窓生九名も、新入生の入学を祝いました。

なお、式に先立ち、九大フィルハーモニーオーケストラが歓迎の演奏を行いました。

表敬訪問 welcome to Kyushu University

バングラデシュ教育省大学局局長



平成十九年三月二十日（火）、シャフィクール・アラムバングラデシュ教育省大学局局長とルットフォル・ラーマン・カーンバンガバンドゥー農業大学学長が梶山総長を表敬訪問しました。

アラム局長、カーン学長は、文部科学省新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業により本学に招へいしたものであり、学術交流及び学生交流の状況及び今後の交流促進に関して、バングラデシュの大学の教育事情も含めて活発な意見交換が行われました。

泰日工業大学学長



平成十九年三月十三日（火）、クリサダー・ウィサワティーラノン泰日工業大学学長が、梶山総長を表敬訪問しました。

泰日工業大学は、平成十九年六月にバンコクに開校予定の大学であり、今回、クリサダー学長は、泰日工業大学支援委員会出席のため来日の折本学を訪れたもので、本学との連携協力関係構築に向けて、活発な意見交換が行われました。

在中国九州大学同窓会だより

在中国九州大学同窓会事務局長
九州大学北京事務所長
（中国農業科学院研究員）
宋敏（ソン ミン）

同窓会設立の背景

中国人の九大留学は九州大学の創設とほぼ同時に始まったとも言える。一九一三年、九州大学が創設早々、三名の中国人留学生を受け入れた。その後の百年に近い歴史の中に、戦争や中国国内の文化大革命などの影響で、中国人の九大留学が三十六年間中断したが、一九七〇年代後半の改革開放政策の導入に伴って再開し、その人数も急速に増加してきた。各年の入学人数から計算すれば、九大の中国人OBはおよそ三〇〇〇人程度に達しているのではないかと推測している。また、これらの九大の中国人OBは、各分野において活躍し、中国のみではなく、さらに様々な架け橋役を演じて、アジア及び世界の発展にも貢献している。こうした在中国九大OB同士及びOBと母校との間における交流が日増しに頻繁になることを背景に、在中国九州大学同窓会は時運に応じて、二〇〇四年十二月二十五日に設立された。



第一回総会


北京事務所開所式

今までの歩み

社会の一人の構成員として我々は、社会で暮らす以上、助け合わなくてはならない。「団結こそ力」という言葉は皆にも耳馴染みだろう。しかし、個人のただ乗り意向は主体の合理的選択が共倒れを招くような問題を常に国家や組合は抱えている。それが故、同窓会のような組織の設立は簡単だが、その運営は頭を悩ませる難題である。特に中国のような組合員意識の薄い国では、通常の会員費制度で同窓会を運営していくのは、不可能に近いと思われる。こうした難問を解けるようにするためには、通常の同窓会とは全く異なった前提条件の下で、方向性を決定しなければならない。つまり時代に応じた役割を果せることこそ、この時代に同窓会のような組織が生き残る手段であろう。こうした認識を踏まえて、在中国九州大学同窓会は、普段のコミュニティとしての機能以上に、母校の教育、研究及び社会貢献などの大学としての機能を果すために色々な役割を分担できるような情報の収集と発信、地域ネットワーク形成などの面においても取り組んできた。具体的には、情報の収集と発信の機能を充実するために、まず、同窓会の設立とともに、在中国九州大学同窓会専用ホームページを開設した。今現在、一日に数十人がアクセスし、BBSへの登録会員も二〇〇人に近付いていることより、このホームページが活発な情報交換機能を担っていると伺

える。次に、メールマガジンの編集、配付である。編集者は力不足で、専門知識のない素人でありながら、皆様の温かいご支援で、配布部数は数千部にまで上ってきた。それに加えて、同窓会を設立してからの二年余りを振り返ってみれば、同窓会第一回総会及び産学連携国際学術シンポジウム（二〇〇四年十二月二十五日）、同窓会新年会（二〇〇五年一月二十一日）、北京事務所開所式（二〇〇六年四月十四日）、同窓会第二回総会及び日中学術交流国際シンポジウム（二〇〇六年九月八日）、世界コメ―中日国際シンポジウム（二〇〇六年十二月十六日）などのイベントやシンポジウムが成功裡に開催され、様々な場面で九大のプレゼンスをアピールする一方、九大や九大ＯＢの研究成果や活動などに関する情報を発信し、多大な関心を呼んできた。

　また、同窓会ネットワーク作りにおいては、ウィンウィン関係の構築による同窓生との繋がりの強化に取り込んできた。同窓生ネットワーク形成は、同窓生の増加に伴って自然発生的に進むものではない。同窓生のネットワーク化には、このネットワークを引っ張っていく牽引役と、同窓生を集めてくる求心力が必要である。まず、牽引役として、中核となる同窓会理事会は最も大事である。二〇〇六年九月に改選した理事会は、二年間の任期で同窓会ネットワークをリードしていくと期待されているが、理事会の方々にもそれぞれの事情があり、同窓会の運営に投じる時間と労力がかなり限られることも痛感している。幸いなことに、九州大学は将来構想の方向性に伴って、二〇〇六年四月十四日、北京に九州大学北京事務所を開設した。九州大学北京事務所と同窓会事務局とが一体となった体制は、同窓会ネットワークの牽引にも力添えになった。また、組織の求心力（魅力）には色々な要因があるが、根本的には「利」とも言える。つまり、会員にとってメリットがあるということは、会員が集まってくるインセンティヴになる。会員にメリットを提供するためには、もちろん一部の会員が寄付をして、他の会員に得をさせる関係もありうるが、損ばかりの会員の脱退により、こうした関係が永く続けられるものではない。理想としては、誰も損をせずメリットを享受できるウィンウィン関係が構築できれば一番である。まさにこうした理想を信じて、同窓生同士、特に同窓生と九大との間における補完的関係の構築に取り組んできた。具体的には、留学生の推薦、共同研究の斡旋などの事業を展開して、ネットワークの繋がりを強めていくと期待している。


梶山総長、柳原理事来所



世界コメ ― 中日国際シンポジウム


第二回総会

今後の展望

今日は、グローバル化と学問の総合化・学際化に従って、従来の個人の人材育成より合力を形成できる集団化またはネットワーク化の人材養成には、大学の役目を求めるようになってきた。その意味で、卒業生のアフターケア、ネットワーク化は大学教育の延長線として、大学の教育または果すべき社会機能の重要な役割の一つといった位置付けになってきた。こうした背景の下で、同窓会の運営にも重大な責任を感じながら、努力していくしかない。だが、こうした重い社会的な任務を果たすためには、担当者の情熱が大事である一方、多くの方々のご理解、ご支援も不可欠である。これからもご支援、ご鞭撻をお願い申し上げたい。

FRONT RUNNER

シリーズ研究

ふろんとランナー

「ふろんとランナー」は、九州大学の研究の最前線をインタビューで紹介するシリーズです。シリーズ第二回目は、比較社会文化研究院の溝口孝司准教授に、理学研究院の古賀誠人准教授が聞きます。

考古学

聞き手　理学研究院　**古賀誠人**准教授

比較社会文化研究院准教授

溝口孝司

みぞぐち　こうじ



VOL 2

社会考古学の理論的・方法論的開発と応用研究により「第三回（平成十八年度）日本学術振興会賞」を受賞

理論考古学の存在価値とポテンシャル

―まず、第三回日本学術振興会賞の受賞、おめでとうございます。さっそくですが、これはどのような主旨で設けられた賞なのですか？

溝口　四十五歳以下の若手研究者を対象に、これまでの研究成果から今後のブレイクスルーが期待される研究者に与えられる賞ということです。

―そのブレイクスルー、突破というところの一番のポイントは？

溝口　私の受賞理由として一つは「社会考古学」という新しい分野の開拓、もう一つは日本考古学の国際化という二つのポイントが評価されたようにうかがっています。

―先生の肩書きには理論考古学者ともあるのですが、これは従来の考古学とどう違うのですか。

溝口　これまでの考古学、とくに日本の考古学は歴史学の一分野として理解されてきました。歴史学が理論的ではないというわけではありませんが、私の考古学はある事象について説明するときに、その説明にいたる過程をどのように明らかにするか、また、ある説明の方法が選ばれるときに、その背景となるものは一体何なのか、というようなことを含めて枠組みを構築し、理論的方法的普遍性の獲得を目指します。そのような意味で、歴史的特異性の抽出を重視する従来の研究とは若干異なります。

―枠組みを組み立てるとか、システム化するといっても、私のような理系の人間は実験結果など証拠がないと空をつかむように聞こえるのですが、考古学ではこれが確たる証しであるといったデータはあるのですか？

溝口　考古学は「物」を対象とする学問です。物を調べるということは、過去の人間が残した行動の痕跡を分析するということになります。しかし、それを残した人間は遠い昔に亡くなってしまっていますよね。人間の行動の痕跡であることは明らかなのですが、具体的にどのような行動の痕跡なのかは直接的にはわからない。そこで、すでに亡くなってしまった人間の行動と、実際に考古学者が取り扱う物との間をどのようにつなぐのか、そのつなぎ方をどのように体系化していくのかが、理論考古学の一つの大きな役割になります。

―体系化はどのようになされていくのでしょう。

溝口　一つには現在も過去と同じような暮らしをしている人々の社会を観察して、そのなかで人々のどのような営みがどのような物を作り出し、どのような痕跡を残しているのかというのを研究していく方法があります。また、もう一つは物の作られ方、使い方などを細かく分析し、さらにそのような痕跡を残すと考えられる行動を実際に実験で再現してみます。その結果と物として残る痕跡との一致を調べ、一致の程度が一定以上高ければ、実験で再現したような行動と同じようなことが過去にも行われていた、ということがいえる。そういう作業を積み重ねて体系化を進めていきます。



FRONT RUNNER

シリーズ研究

ふろんとランナー



先史時代の葬送行為から顕現するもの

―考古学もずいぶん裾野が広いような気がするのですが、先生の専門という場合はどの分野になるのですか？

溝口　私はとくに過去の人々が死者をどのように葬っていたのか。また、葬る時に過去の社会のどのような側面がそこに反映されていたのか、ということを専門として研究しています。時代としては日本であれば、弥生時代や古墳時代。ヨーロッパでは新石器時代、青銅器時代です。

―その研究の面白さとは何なのでしょう。

溝口　たとえば、私のこれまでの研究によれば、先史時代の埋葬形態には過去の人々の時間というものの捉え方が顕現しています。また、その時間観念の移行が社会構造の進展と密接に関わっていることもわかってきました。先ほども述べましたが、人間の行動の痕跡というものを過去の具体的な人間の行動や思考に結びつけていくのは、非常に面白いことです。しかし、同時に難しさというのもあるんですね。さまざまな状況証拠を用いて物と人の営みとを橋渡ししていくわけですが、問題は状況証拠の選択時に、どうしても現代に生きている人間としてのバイアスがかかってしまうこと。そのバイアスは我々の慣れ親しんだ生活のあり方のバイアスだったり、現代社会のシステムから与えられる影響のバイアスだったりと、いくつかのレイヤーがあるわけです。そのようなレイヤーを一つ一つきちんと理解しながら橋渡しをしていくという難しさにこそ面白さも凝縮されているような気がします。

社会考古学とは？

現代社会における考古学の意味と意義の研究

現代史の中の考古学　／　歴史学や社会学との密接な関連

バイアスや自民族中心主義の警戒

成果を相互に生かす

過去の社会の仕組みの研究

例）葬送行為の研究
儀礼の研究
社会諸システムの研究

モノと痕跡の観察
考古学を中心として諸学の方法を総動員して「過去の社会」を解明

現代の非産業化社会と小規模社会の研究

行為の物的痕跡
行為の意味
行為の機能

実際に調べる
記録を参考にする：
人類学や社会学との密接な関係

―先生を考古学の世界へ導いたのは、何だったのですか。

溝口　五歳のときに、両親に連れられて関西地方の遺跡を旅したことが最大のきっかけと言っていいでしょう。奈良県明日香村の石舞台古墳の入り口のところで、両親に撮ってもらった写真が残っているのですが、その旅行で与えられた強烈な印象、たとえば、なぜ昔の人はこんな「物」を造ったのだろうかといった不思議さが現在まで続く考古学への情熱への出発点にはなっていますね。歴史一般に対する興味と同時に、「造られた物・造った人」の観点から歴史を見てみたいという好奇心は、幼少時から一貫しているように思います。



奈良県明日香村石舞台古墳にて。
5歳の時。

―九州大学文学部で学ぶこともその探究心の延長線だったのですね。

溝口　九州大学には弥生時代の研究を中心とする伝統があるのです。その伝統というのは弥生時代を日本列島の一つの時代として位置づけるだけではなく、東アジア的な視点から、ひいては東アジアという特異性を世界のなかで捉えるというものでした。考古学は「人類共通の過去」というものの研究です。九州大学はその点でも限りなく先駆的であり、古くから非常に豊かな遺産をつくりあげてきた歴史があります。故岡崎敬先生、横山浩一先生、西谷正先生という非常に豪華なメンバーが当時研究室におられまして、それも進学の大きな決め手になりました。

考古学が対象とする過去。そこに国境は存在しない

―溝口先生自身、国際性に富んだ教育者としても評価されています。

溝口　考古学は国境の存在しない過去を主要な対象にしている学問です。我々は、common human heritage（人類共通の遺産）を研究することで、そのまま世界とつながっていくわけですから、研究の成果は当然国際的でなければなりません。新たな方法の開発、理論の開発にしても国際的に共通の、共有されるものであるべきで、学生諸君にも英語による研究発表のスキルを習得させ、早くから世界に向けて発信し、また、世界の最新のトレンドを受け入れてもらう必要があると考えています。

―英語プレゼン・ゼミなどを行い、院生には英語による研究発表のスキル習得も図っているそうですね。

溝口　繰り返しになりますが、考古学においては現代の社会を生きる我々が、過去について考えることに付きまとうバイアスがあります。そのバイアスを克服する一つの方法が、人類というものの多様性を現代において十分に認識することだと思います。その意味で学生諸君には国際感覚を早い段階で身につけてもらい、考古学の研究につきもののバイアスをも克服してもらおうというのが、私の意図です。具体的には大学院生ゼミにおけるプレゼンテーション、質疑応答をすべて英語で行うことを試みています。それに伴い、発表のアブストラクトも英文で書いてもらい、チェックと指導を行なっています。また、機会を見つけて院生諸君とともに国際的な研究集会に参加し、ともに研究発表することによって、英語による研究発表のスキル、それから国際的研究者としてのネットワークの涵養にも役立てています。

―あえてお聞きするのですが、日本の考古学は、世界の考古学と比べて特徴的な点はあるのでしょうか。

溝口　あります。日本の考古学の最大の特徴は物そのものの研究、とくに細かな分類というのを非常に大切にする点にあると思います。物や遺構の表面に残っているごく微細な痕跡、それがつくられる時に、人がどのように手や身体を動かしたのかということを詳細にたどることによっ

FRONT RUNNER
シリーズ研究
ふろんとランナー

考古学

考古学とは「人類共通の過去」の研究。



これからの人材には我慢強さと、公平で幅広い視座を

―今後、どんなことがブレイクスルーするのでしょうか。見えないからこそブレイクスルーと言うのでしょうが。

溝口　一般には考古学は発見の学問だと捉えられています。新しい遺跡や新しい遺物が発見されることによって歴史が一夜にして変わる、そんなイメージが強いのではないでしょうか。しかし、実際の研究の歴史を紐解きますと、じつはそういうことは少ないことがわかります。やはり、研究というのは先学の研究の歴史に基づき、足りないところや新たな展開の必要なところを見つけ、それをどのように明らかにしていくかにつきます。新たな方向性や新たな理論と引き比べながら考えて、一歩一歩積み重ねられていくものなのです。そのような意味で、ブレイクスルーというものがさほど華々しいものではないことを、まず最初にのべておかなければなりません。

―モノサシがあるのは便利ですね。

溝口　そのモノサシを用いて、遺跡や物が営まれ使用された時代を、非常に細かく位置づけることができ、社会や文化の変化について細かく分析することができます。一方、とくに欧米を中心とする研究は、最初に社会や文化のモデルを作成し、それと遺跡や遺物を引き比べるという方法を取ることが多い。すなわち、日本の考古学的な研究の特徴をボトムアップ型とするならば、欧米を中心とする研究の特徴はトップダウン型といえます。

―どちらが有効なのですか。

溝口　よい研究をするためには、ボトムアップの視点と、トップダウンの視点の両方が必要です。ただ、ボトムアップの視点を欠くと、そこから描かれる絵柄が非常に大まかなものになることは避けられません。そういう意味で、日本のボトムアップ型の細やかな考古学と欧米を中心とする考古学の大局的なトップダウンの視点とをどのようにリンクしていけるのかということは大きなチャレンジですし、今後私がやっていきたいことでもあります。

―なるほど。

溝口　ただ、考古学は人類の共通の過去の研究でありながら、世界各地の歴史やプロセスの比較という観点からはまだ十分に探求されていません。とくにいわゆる国家というものの起源、それに伴う社会の変化といったことの比較研究に関してはようやく組織的、世界的な研究が行われるようになったところです。東アジアでは、まだはじまったばかりと言って良いでしょう。また、そうした社会の大きな変化に伴って人々の考え方や物の見方がどのように変わったか、そういうソフトの面の研究になりますと、これはほとんど緒についたばかりで、まだ二十年そこそこの歴史しかありません。

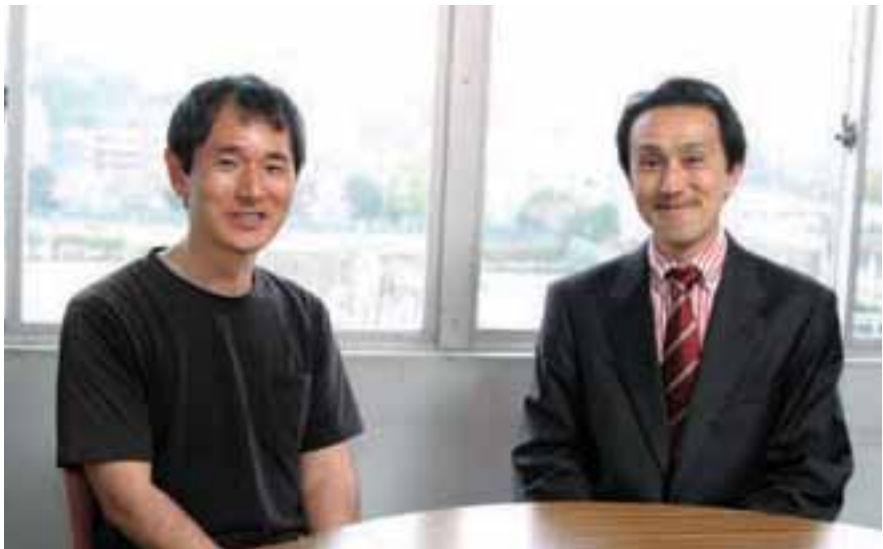
―その研究こそ、先生の舞台ですね。

溝口　私の研究は過去の人々の時間の感じ方、それから時間のマーキングの仕方といったものと、社会の構造やシステムとの関わりを、お葬式においてまもられる約束事の復元であるとか、墓地の空間構造などを通じて明らかにする研究です。このようなソフトで細かな研究の積み重ねを糸口にしながら、社会の変化、それに伴う人々の考え方、世界観の変化というものをグローバルな視野をもって研究していく。そのなかで世界的な共通性、地域の特異性というものを明らかにしていく。そうしたことを積み重ねる中で、世界に発信できるようなブレイクスルーが見えてくるんじゃないかと考えています。



―これからの考古学研究者に求められる態度や資質、いわゆるヒューマンスキルとはどのようなものでしょうか。広く学生へのメッセージも含めてお聞かせください。

溝口　考古学は非常に細かな視点と、幅広い視点の両方を必要とする学問であると言いました。一方で、過去の人々が残した痕跡をどれだけ細かく観察でき、それを残した人々の行動や考え方と結びつけられるのかということが重要になります。同時にそれらを通じて営まれた人々の生活や社会というものを明らかにするためには、現代に生きている多くの人々の文化や社会と考古資料とを引き比べつつ、そのなかに過去の物質文化というものをしっかりと位置づけていく必要があります。そのような意味で細やかな観察を厭わない我慢強さと、幅広い視野、多くの文化や社会を公平に比較して考えを練っていく柔軟さ、幅広さを身につけてほしいと思います。とくに一つ付け加えたいのは、現在において過去を研究するのが考古学ですので、現在に生きる我々の考え方というものが当然大きく影を落とします。その影というのはときにナショナリズムと結びついたり、その他いろいろな困難や悲劇と結びついていった歴史があるわけですね。そうした意味でも、現代の社会や歴史についても造詣を深め、そのなかに考古学という学問を位置づけることができる常識、教養といったものもぜひ身につけていってもらいたい。そういうふうに思います。



溝口准教授（右）と、聞き手の古賀准教授

長崎検番　芸妓

玉羽

たまは

本名　白水千草　しらみず　ちぐさ



平成十八年十月十九日、「長崎に九州大学出身の芸妓さん誕生」のニュースがテレビ、新聞などで全国に流されました。

それは、文学部を卒業して福岡で働いていた白水千草さんが「何かになりたい」思いを膨らませて、「これだ」と見つけた夢を「芸妓玉羽」として実現した瞬間でした。

「夢」が形作られ実現に至った経緯を、長崎で玉羽さんに伺いました。



玉　羽

長崎出身。長崎北高校から、平成13年３月、文学部（認知心理学）卒業。福岡市内の民放関連会社に就職。平成18年７月、会社をやめて帰郷し長崎検番に見習い芸妓として入る。同年10月19日、芸妓玉羽としてデビューした。

「何となく」で苦労する。

―　卒業生の方々にお話を伺うときに常に最初にお訊きする質問ですが、九州大学を志望されたのは、どのような理由から？

玉羽　実はこれといった理由はなかったのです。強いて言えば、成績から合格しそうだったから。長崎大学に文学部はありませんでしたし。文学部を選んだのも、特に本が好きだったからということでもなく、何となくというのが正直なところです。

九州大学時代は、九州大学病院の近くに下宿して大学通りを自転車通学、お昼は生協食堂で食べ、サークルにも所属せず、といった学生生活でした。

―　文学部での専門は認知心理学ということですが、これはどういう理由から？

玉羽　一年生の終わり頃、学科や専攻の説明会で、高校の倫理社会で習ったクレッチマーの性格分析に類するお話を聞いて、こういうことをやるのなら心理学が一番面白そうだと思いました。実は文学部に心理学があるということもよく知らなかったのです。

でも、専門に進んでから分かったのですが、文学部の心理学の中心テーマは「こころとは何か」を科学的に追及すること。私の興味はどちらかいうと「人間の心理と行動」を追及する教育学部の臨床系心理学でしたので、途中で教育学部に転学部する決心もつかないまま、卒業まで苦労しました。


九大生時代、歴史の研修に訪れた佐賀県相知「見帰りの滝」で（左）

芸妓さんが花街を歩くシーンを見た瞬間、「芸妓さんになりたい」と明確な気持ちに。

―二年生の時に京都を旅行されて「舞妓さん」を体験されたとか。それは玉羽さん誕生につながる出来事だったのでしょうか？

玉羽　京都で、舞妓さん姿で町を歩く体験をしたのですが、これは今につながる出来事だったと言えます。女性は皆、潜在的に華やかなものへの憧れを持っているのではないでしょうか。このとき味わった言葉にできない嬉しさは、私の中にしっかり残ったようです。それをずっと意識していた訳ではありませんが。

―苦労しながらも平成十三年三月に文学部を卒業して福岡で就職されましたが、そこは「居場所」ではなかった？

玉羽　卒業後すぐ民放関連の制作会社に就職し、半年後に別の民放の子会社に移りました。仕事は、キー局から送られてくる放送用のVTRを見て、放送して問題ないか、禁止用語は使われていないか、放送時の状況とズレはないかなど、放送事故が起きないようチェックするというものでした。特に放送業界に興味があったのでもなく、就職もなんとなくしてしまった感じでした。

―そういう白水千草さんが、「芸妓」の二文字に捕らわれてしまう。

玉羽　仕事をしながら「これではいけないな」と感じていました。一会社員というのではなく、「何か」でありたいという思いが強かったからです。その「何か」の候補はいくつかあって、その中には心理カウンセラーというのもありました。様々な職業の専門学校の資料を取り寄せたりセミナーに参加したりもしたのです。

　そんなとき、「エビスビール」のCMだったと思いますが、仕事でチェックしていたVTRに芸妓さんが花街を歩くシーンがあって、見た瞬間「これだ、これに憧れていたんだ！」とその気になってしまったのです。それまでなんとなく舞妓さんに憧れ、着物を着たいな、着付けでも習おうかなどと思っていたのが、「芸妓さんになりたい」と明確な気持ちになりました。大学を卒業して三年目、今から四年ほど前のことです。

―人は可能なことしか本当には望まないそうですが、そのとき「きっと芸妓さんになれる」と思ったのですか？



料亭花月の玄関で、
姉さん役の音羽さん（右）と。



九大人が伝える
進化する文化遺伝子
シリーズ九大人インタビュー

私という人間を好いていただける芸妓になりたい。

玉羽　まず京都に踊りを見にいきました。踊りの稽古を始め、「芸妓への道」をインターネットや本で探しました。

小さい頃から日舞を習っていた京都の女性が、芸舞妓の踊りの舞台に助っ人として何回か出ているうちに芸妓にならないかと声がかかり、「舞台に出られて、好きな芸に思う存分打ち込めるのなら」と、勤めをやめて芸妓になったというエピソードを本で読みました。それまで、舞妓さんからしか芸妓にはなれないと思いこんでいましたので、その本との出会いは大きかったです。「自分にもなれるかもしれない」と思ったんです。しかし、京都にはつてもない。そうしているうちに博多券番の存在を知り、さらに調べていて、長崎生まれの長崎育ちとして恥ずかしいことですが、長崎検番*があることを知ったのです。

＊検番
料亭へ芸妓を派遣したり、花代の精算をする事務所。
（博多は券番と表記する。）

―　人は誰でも様々な憧れを抱くものです。しかし実生活との間の溝を越えるのは容易でなく、大半は憧れや夢のまま消えてしまう。憧れの世界へ実際に飛び込んだ玉羽さんの勇気の源は何だったのでしょう。不安はありませんでしたか？

玉羽　不安はもちろんありました。年齢のことはもちろん、小さい頃から踊りを習ってきたのでもないですし、諦める材料には事欠かなかった訳です。三年間は悩みながらも仕事を続けていましたが、結局芸妓になりたい一心で飛び込んでいきました。

幸い、長崎検番に紹介してくださる方があって、平成十八年七月中旬に仕事をやめて長崎に帰り、指導役の音羽姐さんの下で見習い修業を始めました。いろいろ教えていただきながら、お座敷に付いて行ったり踊りのお稽古をしたりして、十月にお披露目そしてお座敷デビューをさせていただきました。

―　よかったですね。

玉羽　憧れの世界に入ることができて本当にうれしかったです。





九州大学卒の芸妓誕生に多くのマスコミが集まり、全国に報道された。

―長崎検番の玉羽さんとして今どんなことを思われますか？「居場所が見つかった」という感じでしょうか。

玉羽　居場所が見つかったというよりも、思い切って飛び込んできて「正解だったな」「よかったな」と強く思います。そして人に恵まれた幸運に感謝しています。

　姉さん役を引き受けてくださった音羽姐さんは本当にいい方で、可愛がっていただいていますし、たくさんのことを教えていただきました。長崎の町や市民の方々が検番をとても大事にしてくださっていることも分かりました。応援団が多く、暖かい雰囲気が有り難いです。京都や博多の花柳界はまた違った雰囲気や良さがあるのでしょうが、私は長崎でよかったなと思っています。


宴がひらけて帰る人を縁起のお酒と三味線の音で送る「送り三味線」は長崎ならではの風習。

―芸妓さんはどんな毎日を過ごしていらっしゃるのでしょう。今目標としていることは？

玉羽　私たち芸妓一人一人は検番に登録する個人事業主と言いますか、収入も完全出来高制です。検番は、私たちの事務所兼稽古場でしょうか。昼間にいろいろなお稽古事をして、それが終わると髪結いさんへ行きます。お座敷はだいたい週四、五回。急にその日に入ることもあります。今日は和服ですが、何にもないときは普通の格好をしていますよ。

　お座敷で私が一番楽しいと感じるときは、お客様とお話したり笑ったりしているときです。たくさんの方とお会いしてお話をするのが一番好きで、周りがわっと盛り上がっている中で、一人のお客様と真剣に語り合っている、といったことがよくあります。もちろん芸妓は見た目の華やかさがないといけませんが、私は、私という人間を好いていただける芸妓になりたいと思っています。私と話をすることでお客様が楽しかったり明るい気持ちになることができるような、そういう芸妓になりたいのです。

―臨床心理を学びたかった白水千草さんと玉羽さんとは、やはり通じているようですね？

玉羽　人間が好き、なのでしょうか。いつか、ボランティアでもいいからカウンセラーの仕事をしたい、そんなことを今でも時々思います。

―最後に、「自分探し」をしている後輩たちへ、メッセージ、アドバイスをお願いします。

玉羽　（少し考えて）明確な目的がなく大学に入り、どこへ向かって行こうかまだ見えていない人へ。いろんな人と会って話し、いろんなものを見て、できれば興味を持ったことを全部やってみてはどうでしょう。頭の中で考えているだけでなく、実際にやってみて初めて分かる事があります。そして「これだ」と思う夢が見つかったら、一人でも多くの人にそれを話してみてください。「夢は人に話した方が叶う」と聞きますが本当にそのとおりで、きっとどこかで誰かが聞いていてチャンスをくれます。そのためにも、人とのつながりを大事にしてください。

―ありがとうございました。これまでたくさんインタビューを受けられてたいへんだったでしょう。

玉羽　九大卒ということで注目していただきましたが、私自身は何ら特別なところはなく、むしろ人より遅いスタートに引け目を感じているくらいです。でも、九州電力や三菱重工など長崎にいらっしゃる九州大学ＯＢの皆さんに可愛いがっていただけるという嬉しいこともあるのです。三菱重工の九州大学文系出身の方々で作る「松原会」の宴会には「準会員」として呼んでいただいています。最後は学生歌「松原に」の合唱で終わるのですが、九州大学にこんな歌があるなんて初めて知りました！



「夢は人に話した方が叶う」

興味を持ったことを全部やってみる。そして「これだ」と思う夢が見つかったら、一人でも多くの人にそれを語ること。

九大人が伝える
進化する文化遺伝子
シリーズ九大人インタビュー

新シンボルロゴ決まる！

二〇〇七年一月、九州大学はUIプロジェクトチームの提案を受け、新しいロゴタイプ（九州大学の文字）及びシンボルロゴ（シンボルとロゴタイプの組み合わせ）を決定しました。

新しく決定したシンボルロゴは、「ロゴタイプの明確さ」、「使いやすさ」、「国際性」のコンセプト、及び学内外七五〇人以上に行ったアンケート調査の結果などを基にデザインされています。シンボルロゴには五つのタイプがあり、今後九州大学が発信するさまざまなメディアで使用していきます。

	天地方向	左右方向
和文＋英文	九州大学 KYUSHU UNIVERSITY	なし
和文	九州大学	九州大学
英文	KYUSHU UNIVERSITY	KYUSHU UNIVERSITY

シンボルロゴの仕組み

シンボルロゴは「シンボル」と「ロゴタイプ」の二つの要素から構成されます。組み合わせは厳密に定められており、使用する状況に合わせて五つのタイプのいずれかを使用します。



シンボル（松葉をかたどった円形のマーク）

一九五〇年から使用されている学生バッジのデザインをより使いやすく、より現代にマッチした形でリデザインし、二〇〇四年から正式なシンボルとして使用しています。

ロゴタイプ（「九州大学」「KYUSHU UNIVERSITY」の文字）

和文ロゴタイプはシンボルの形状に合わせたオリジナルの書体をデザインしました。英文は和文に合わせてオランダのswiftという書体を指定しています。

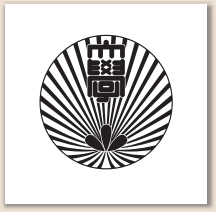
シンボル（松葉マーク）の歴史

九州大学のシンボルの歴史は一九四九年にさかのぼります。学生バッチの図案公募が行われ、七十人の学生から一五三点の応募がありました。応募作品の題材は、松の木や葉、松かさや樹皮といった松を図案化したものが多く、当時病院地区から箱崎地区まで一面に広がっていた松原が多くの学生の心に残っていたことがうかがわれます。

学校側、学生側同数の委員からなる審査会を開いて検討した結果、当時、農学部農業土木学科三年だった宗好秀氏の、松の葉をモチーフとした図案が採択され、一九五〇年二月十日から使用されることになりました。A

二〇〇三年三月三日、約半世紀の伝統を持つ学生バッジの図案をもとにデザインした新しいシンボルが広報専門委員会において承認されました。これが現在使用されている現シンボルです。同年、ブランド戦略の一環として、このシンボルを商標登録しました。B

A



B



UIプロジェクト





二〇〇四年に現シンボルが商標登録されて以来、様々なシーンでシンボルを使用してきましたが、九州大学のブランドイメージをさらに確立し、より強化する目的で二〇〇六年四月に大学院芸術工学研究院と芸術工学府に所属する教員と学生、及び広報室から成る「UIプロジェクト」が始動しました。

このプロジェクトの特徴のひとつは、芸術工学府の大学院生が授業も含めて、積極的に関与し、シンボルやロゴタイプのデザイン、使用ルールなどを検討してきたことです。UIプロジェクトの活動については次号の「九大広報」で詳しくご報告します。

UIカラー

九州大学を象徴する色を「UIカラー」として定めています。レイアウトなどにUIカラーを効果的に使うことにより、「九州大学らしさ」を強調することができます。

DIC230
C35M100Y50K35
Nocs51-02
(10RP3/12)

UIデザインマニュアル

二〇〇七年三月、シンボルロゴを適切に浸透・普及させることを目的に「UIデザインマニュアル」を作成しました。また、マニュアルを読みやすく、いつでも参照できるようにした「UIハンドブック」も作成しています。シンボルロゴのしくみ、運用の考え方やルール、さらに封筒、レターヘッド、名刺、印刷物などへのシンボルロゴの適用・活用方法も提案されています。詳細は左記のURLからご覧下さい。

http://www.kyushu-u.ac.jp/university/logo/index_top.ph

例：名刺（UIハンドブックP46、P47）



お問い合せ／九州大学広報室
電話：092-642-2106
メール：koho@jimu,kyushu-u.ac.jp

九州大学応用力学研究所 RIAM フォーラム 2007

【日時】2007年6月14日（木）午後1時～15日（金）午後5時15分
【場所】九州大学筑紫地区総合研究棟（C-CUBE）1階　筑紫ホール

昨年一年間の全国共同利用研究所としての応用力学研究所の活動を報告する、研究報告会「ＲＩＡＭフォーラム２００７」を今年も六月十四日、十五日の二日間、総合研究棟（筑紫地区）で開催します。

内容は、昨年と同様、応用力学研究所の研究活動の概要、主な研究成果、共同研究の成果についての報告ですが、今年の特別セッションとして「力学の応用における新領域創成に向けた研究」を企画しております。また二日目の午前中には、新しい試みとして、研究者の資質を国際レベルへ向上させることを目的とした「国際ファカルティ・ディベロプメント（ＩＦＤ）セミナー」も企画しています。このセミナーでは、ロシア・ラブレンティエフ流体力学研究所とアメリカ・マサチューセッツ工科大学から講師をお招きし、研究の評価と戦略的活用について講演をしていただく予定です。

応用力学研究所の研究活動の報告は、この研究会の他に隔年発行の研究所要覧やホームページ等に掲載されています。また、共同研究については、更に共同研究報告書と研究集会報告書が出版されますので、あわせてご覧いただければ幸いです。

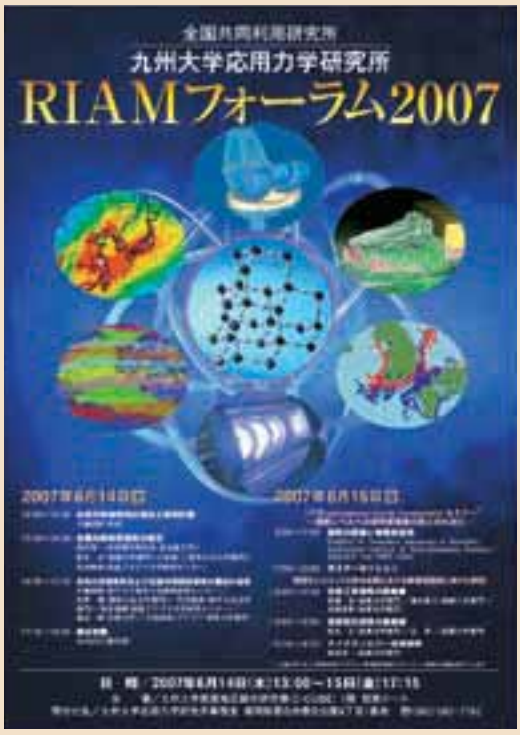
プログラム

6月14日（木）

13:00～13:30	応用力学研究所の現状と将来計画
13:30～14:30	全国共同利用研究の概況
14:50～17:30	応用力学研究所および 全国共同利用研究の最近の成果
17:30～18:00	総合討論
終了後	懇親会

6月15日（金）

9:00～11:00	IFD (International Faculty Development) セミナー ― 国際レベルへの研究者資質の向上のために ―
11:00～13:00	ポスターセッション
13:00～16:20	特別セッション 「力学の応用における新領域創成に向けた研究」
13:00～14:30	生体工学研究の新展開
14:50～15:50	波浪防災研究の新展開
15:50～16:20	ナノテクノロジー応用研究
16:45～17:15	総合討論



問い合わせ先　九州大学筑紫地区事務部庶務課　TEL092-583-7504

健全で快適なキャンパス環境をめざして

セクシュアル・ハラスメント等の相談件数等

平成十八年度の九州大学におけるセクシュアル・ハラスメント等の相談件数等は、次のとおりでした。

相談窓口の相談員に相談があった件数 **26** 件

そのうち正式な苦情申立てのあった件数 **5** 件

セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワーハラスメントなど人としての尊厳を侵害する行為は、決して許されません。

一人一人がお互いの人格を尊重するとともに、「相手の嫌がることは言わない、行わない」という人としてのマナーを守りましょう。

健全で快適なキャンパス環境を実現するため、九州大学は、これらの問題に対して、毅然とした態度で臨みます。

セクシュアル・ハラスメント等相談員

本学ではセクシュアル・ハラスメント等に関する相談や苦情の申出に対応するため、学内に相談員を配置しています。相談員の氏名や手続きの流れ等はホームページに掲載しています。

なお、相談者の所属部局等などに関係なく、どの相談員にでも相談することができます。相談したことによるあなたのプライバシーは必ず守られますので、一人で悩まず、まずは誰かに相談してみてください。

セクシュアル・ハラスメント等防止啓発のための冊子を作成しました



平成十九年三月にセクシュアル・ハラスメント等に関する防止啓発のための冊子「心の傷　あなたには見えますか?」を作成し、学生の皆さんや教職員の皆さんに配布しています。セクシュアル・ハラスメント等に関するQ&Aなどをわかりやすく記載していますので、加害者にならないためにも、また、被害者にならないためにもぜひ参考にしてください。

（総務部職場環境室）

URL セクシュアル・ハラスメント等の防止・対策　http://www.kyushu-u.ac.jp/university/sekuhara/index.html

新聞で報道された九州大学

平成十九年二月上旬～三月下旬

2月

ピカソ資料展　井上尚英名誉教授寄贈品集め
（夕刊デーリー　2／1）

「情報を守る暗号の話」鎌田正良名誉教授らが講演
（西日本　2／2）

日中韓の相互理解へ文化、産業、医療をテーマに「日中韓シンポジウム」開催　アジア総合政策センター
（日経、西日本　2／2、3）

九州大学伊都キャンパス水素ステーション　ＨＨＥＧ方式再開断念
（日経、読売、毎日、朝日、熊本日日、2／7）

川づくりシンポジウム　五ヶ瀬川流域
島谷幸宏教授らのグループ
（夕刊デイリー　2／7）

九大法学研究院タイ司法府と国際交流協定を締結
（西日本　2／7）

天神の未来像　九大建築学科の学生たちが提案
（西日本　2／7）

インド系起業テーマ　アジアラウンドテーブル　九大で開催
（西日本　2／7）

芸術工学部、芸術工学府卒業修了制作展示
（朝日　2／8）

中国の人工衛星破壊実験破片ＪＡＸＡの「だいち」に衝突の可能性　平山寛工学研究院助手
（毎日、朝日　2／8）

ままならぬ臓器自給　九州大学で開催された「日中韓シンポジウム」揺れる医療
（四国　2／9）

日中韓シンポジウム　ポップカルチャー「東アジア人」歴史認識問題も
（朝日　2／9）

「森を大切に」日田市日隈小学校でＯＢ課外授業　矢幡久熱帯農学研究センター教授
（大分合同　2／9）

肌触れ合うと鳴るドラム　九大先導的デジタルコンテンツ創成支援ユニット　大学院生ら作品出展　アジア美術館
（西日本　2／9）

九州大学・北海道大学合同活動報告会
（読売　2／10）

九大と前原市「農力（のうりょく）フォーラム」開催
（西日本　2／11）

脳機能検査より精密に　九大病院ブレインセンター診療科の枠越え
（西日本　2／12）

若田光一さん　宇宙で長期滞在へ　九大の一年後輩の東野伸一郎講師
（西日本　2／13）

五一例目の脳死移植へ　九州大学　膵臓と腎臓の同時移植
（読売、毎日、山陽、県民福井、西日本　2／13、14、15）

医学研究院長に髙柳涼一氏
（西日本　2／15）

シネマでくらし小百科　マディソン郡の橋　出会いと別れ
（西日本　2／15）

「いとしまサイエンスキャラバン」　九大助手ら研究紹介
（西日本　2／16）

先導物質化学研究所長に永島英夫氏
（西日本　2／16）

人工降雨　実験に成功　真木太一農学研究院教授　渇水・砂漠化対策へ
（読売　2／16）

よみがえる炭鉱の日常　九大図書館所蔵の貴重な資料　六〇〇点展示　アクロス福岡
（西日本　2／16）

世界のコメ学術研究グループ（代表：伊東正一農学研究院教授）　九大西新プラザでシンポ開催
（西日本、読売　2／16、19）

九大　部局裁量で講座編成「三位一体の改革」　教員配置柔軟に
（朝日　2／17）

九大が産業技術数理研究センターを新設　高度情報化社会見据え
（西日本　2／17）

九州大学「e-World プロジェクト」実証実験　ＩＤを統合管理したカード一枚で移動・食事・買い物・施錠…
（毎日　2／17）

悩める農家に九大参上「農業のお悩みドーンと受け止めます」　若手研究者が地元相談会
（西日本　2／17）

医を診る「薬と薬」の相互作用　複数の服用は相談を　笹栗俊之医学研究院教授
（朝日　2／17）

「九州大吟醸」浜地酒造で学生らが仕込み作業
（西日本　2／18）

世界に一つの船を設計　船舶海洋システム工学コース
（西日本　2／18）

第三回ＳＩＡ　台湾編　高木のぶ子　アジア総合政策センター特任教授
（西日本　2／19）

別府先進医療センター「がん治療セミナー」開催
（大分合同　2／19）

井上尚英名誉教授　鑑定医がみた和歌山毒物カレー事件
（夕刊デイリー　2／19）

甲斐諭教授が南阿蘇村で講演　農家はニーズの把握を
（熊本日日　2／19）

九大病院高度先進医療センター「患者さんと考える明日への医療」公開講座
（西日本　2／19）

国土交通省航空・鉄道事故調査委員会委員長に後藤昇弘工学研究院教授
（毎日、読売、佐賀　2／20、21）

九大大橋キャンパス演劇部「あるブタ肉のおはなし」
（日経　2／20）

九大教授の二人「うつ」を題材に講演　久保千春、荒木登茂子教授
（西日本　2／20）

製造業の人材育成へ　九大が二十三日に講演会開催
（西日本　2／21）

「芸術文化を取り込んだ先導的な食育と地域農産物のブランド化」　農学部附属農場
（読売　2／22）

鑑定医がみた和歌山毒物カレー事件　井上尚英名誉教授
（夕刊デイリー　2／22）

インターンシップ　福岡でシンポジウム開催　九大院生らが成果発表
（西日本　2／22）

火災発見ロボット公開実験　九州大学で
（朝日、読売、産経、日経、佐賀、福井、山梨日日、熊本日日、高知、茨城、東奥、宮崎日日、北国、新潟、四国、山口、岩手日報、富山、北陸中日、沖縄タイムス、奈良、日刊工業　2／22）

ＮＩＴＥが九大と提携　人間特性データ共同研究　人材交流など連携
（日刊工業　2／23）

応用力学研究所に新拠点拠点　東アジア海洋大気環境研究センター　高温プラズマ力学研究センター
（日刊工業　2／23）

製造中核人材育成事業特別講演会を開催　鹿児島で
（日刊工業　2／23）

九大と佐賀県唐津市が協定締結　イカ協定　地域活性化討論
（西日本　2／23）

骨のダイオキシン濃度測定承認　九大倫理委員会
（西日本、長崎、熊本日日　2／24）

食育テーマに討論とコンサート　農学研究院主催
（西日本　2／24）

ローヤルゼリー　環境ホルモン抑制効果　山田耕治農学研究院教授
（山陽　2／24）

農家の悩みに解決案　伊都キャンパス　若手研究者らがワークショップ
（西日本　2／24）

九州大学　先端医療研究の講座　ＡＺＥが寄付　臨床治療や人材講座
（日経　2／24）

歯磨きの大切さ知る医療セミナー　前田勝正歯学研究院教授
（読売　2／25）

上黒岩フォーラム　研究は今　人骨　狩猟採集の証拠　岡崎健治大学院生
（愛媛　2／25）

長崎西高生物部　ヤシの天敵のゾウムシ調査　九大の協力で
（西日本　2／26）

二次試験開始　九州大学伊都キャンパスで初めて　工学部を一三八二人が受験
（朝日、西日本、毎日、読売　2／26）

五十二例目の脳死臓器移植　九州大学病院　腎臓移植
（読売、山陽、西日本、朝日、富山、日本海、釧路　2／26、27）

物理の世界に親しんで　高校生向け体験入学　九大理学部
（西日本　2／26）

遠隔地の口ボットが同じ動き
動作予測　長谷川勉システム情報科学研究院教授
（日経産業　2／26）

九州地域宇宙産業講演会
九州大学医学部百年講堂で
（日経　2／26）

火災感知するロボット開発
九大が公開実験
（神戸　2／27）

一人暮らし　身近な相談相手探そう
九州大学のサポート体制
（西日本　2／27）

賢く楽しむ　人との出会い大切に
九州大学田島寮　寮生活　部屋探し
（西日本　2／27）

患者死因第三者が究明
厚生労働省指針　福岡でモデル事業
九大など
（西日本　2／27）

九大の技術紹介します
九大が福岡銀行と産学連携締結
（毎日、西日本　2／28）

福津市の福祉会館で
九大などが合同寄席
（西日本　2／28）

九大大学院で歯学博士号取得した
関三千男さん　五六歳　きのうより若く
（読売　2／28）

3月

唐津市、九大と協力協定
新産業の創出などを探る
（佐賀新聞、西日本　3／1）

九大、全学にIPv6導入
次世代環境先駆け実現
（日刊工　3／1）

人工降雨挑戦は続く
退官後も続行
真木太一農学研究院教授
（西日本　3／2）

伊都キャンパス丸ごと実験場
九大院応用化学部門
（西日本　3／2）

工藤・九大大学院教授退官を記念
原子力テーマに講演
（読売　3／2）

環境問題を考える日中韓シンポジウム　九大で初開催
（朝日、西日本　3／2、5）

医を診る　薬効・副作用の個人差
遺伝子の違いで危険も
笹栗俊之医学研究院教授
（朝日　3／3）

火災感知するロボット
九大などが公開実験
（岐阜　3／3）

SIAIDAY　高木のぶ子と浸る
台湾　アジア総合政策センター
（毎日　3／3）

ドクターに聞く　意志に反した行動が続く　トゥレット症候群
山下洋九大病院助教
（西日本　3／4）

視覚障害者の現場復帰を
視覚分野の技術の進歩
石橋達朗医学研究院教授
（西日本　3／4）

東レ科学技術賞
新海征治工学研究院教授受賞
（産経　3／5）

たたいてリハビリ　伊丹の老健施設
ゲーム会社と共同開発
高杉伸一郎医師
（毎日　3／5）

チンパンジー　雌の発情期ずらし合う　粕谷英一理学研究院助教授ら調査
（読売　3／5、6）

「光と水の伊都未来都市構想」応用化学部門　伊都キャンパスで開催
（西日本　3／6）

九大学友会賞　中核派が横領
三容疑者逮捕
（西日本　3／6）

箱崎に春一番　九大合格発表
（朝日、毎日、読売、西日本　3／8）

九大が文系ポスドク支援
中小と就職マッチング
（日刊工業　3／9）

浸り考え識るアジア
SIAIDAY一年を振り返って
高木のぶ子特任教授
（朝日　3／9）

医を診る　不必要な服用は避ける
笹栗俊之九大病院教授
（朝日　3／10）

別の方式で再開目指す　水素ステーション事故　九大、地元住民に説明
（西日本　3／10）

新キャンパスづくりも、新たなステージへ　九大伊都キャンパス情報
（西日本　3／13）

かなう？人工降雨の夢
九大グループ実験成功
（毎日　3／15）

富士通　九大からスパコン受注
（日刊工業、日経　3／15）

九大退職の教授十七日から講義
真木太一農学研究院教授
（読売　3／15）

九大跡地利用計画委が策定
六本松キャンパス
（西日本　3／16）

医を診る　十二週まで服用に注意
笹栗俊之九大病院教授
（朝日　3／17）

九大助教授が車を足げり
「弁当に接触され・違法性は阻却」
（西日本　3／17）

服部九大大学院教授が自説強調
下の橋大手門復元めぐりシンポ
（西日本　3／18）

九大退職講義の市民公開講義
真木太一教授が「風」を語る
（読売　3／18）

産科医不足　妊婦の危機感・希望
現実と落差
九大病院と久留米大病院で調査
（西日本　3／20）

警固断層　防災意識の再確認必要
九大が注意喚起
（西日本　3／20）

旧石器・縄文なぜ消えた　小学校の社会科教科書　西谷正九大名誉教授
（朝日　3／20）

育てリーダー　大手企業、九大と提携し「講座」
（読売　3／20）

大学・地域との連携
松隈明彦九大・糸島会幹事長（九大博物館教授）
（読売　3／21）

お産できますか　加速する産科医不足　和氣徳夫九大病院教授
（西日本　3／21、22、29）

「九州は一つ」の俗論を破りたい
秀村選三九大名誉教授
（朝日　3／23）

「中高生医師」オペ体験
九大病院が手術講座
（日経　3／23）

ナノチューブで作製　九大、電子材料に応用へ
（日経　3／23）

九大教授の「市民公開退職講義」
永池教授が経済学語る
（読売　3／24）

医を診る　人災回避へ教育法探る
笹栗俊之九大病院教授
（朝日　3／24）

小国情報の発信構築状況を説明
芸術工学研究院
（熊本日日新聞　3／24）

医薬品開発で患者救う
九大医卒アキュメンバイオファーマ社長鍵本忠尚さん
（読売　3／24）

美里町などの群発地震　断層と直接関係なし　九大地震火山観測研究センター
（熊本日日新聞　3／25）

九大アメフト部
初勝利向け筋力アップ
（読売　3／26）

笑顔の巣立ち　九大で卒業式
（読売、西日本　3／26）

工藤教授エネルギーを語る
九大退職教授の市民公開講座
（読売　3／27）

石炭専門家育成へ協定
九大と三井松島海外権益狙う
（朝日、西日本　3／28）

九大学友会経費引き出し不起訴
（読売、西日本　3／28）

炭坑全盛期写真で紹介
九大図書館蔵資料巡回展示
（朝日　3／28）

九大演習林を楽しく歩こう
（西日本　3／28）

私の視点　対中ODA環境分野限定で継続を　佐藤剛史農学研究院助手
（朝日　3／29）

九大で膵臓と腎臓同時移植
（西日本　3／29）

九大卒業生前原市の河野さん
JICA派遣でタイに
（西日本　3／29）

技術者育成へ協定締結
石油天然ガス・金属鉱物資源機構と
（日経　3／29）

九州の旧産炭地の現状と将来
後藤研、内野健一九大名誉教授に聞く
（西日本　3／30）

九州大学　最上級の格付「AAA」
（読売、長崎　3／31）

「東アジア人」意識は本物か　日中韓　同質性と異質性　大野俊アジア総合政策センター教授
（毎日　3／31）

英学術書の盗作疑惑　割れる「著作権」判断芸術工学研究院
（西日本　3／31）

東京ミッドタウン　九州大学・芸術工学東京サイト開設
（西日本　3／31）

薬学研究院公開講座　「天然薬物と健康」
（西日本　3／31）

秀村選三名誉教授　学士院賞、恩賜賞受賞
（南日本　3／31）

九大生が案内する 世界のキャンパス



授業終了後、語学堂の建物（左側の薄緑の建物）から、出てくるところ

所属
文学部（社会学専攻）3年
久屋愛実 くやあいみ

交換留学先
Dongguk University 東国大学校
韓国・ソウル

留学期間：2006年3月～2006年9月

私は二〇〇六年三月から九月までの約半年間、韓国ソウルにある東国大学校に留学していました。専攻は社会学です。留学中の生活は、語*学堂の授業を中心に、午前中に語学堂で韓国語を学び、語学堂終了後に食堂で昼食をとり、そのあと午後から二時間ほど大学（専攻科目）の授業をとる、というスケジュールでした。語学堂では一級（初級）から六級（高級）までがあり、私は半年を通して五～六級を受けていました。三～四級は文法を中心に学びますが、五～六級になると、文法事項は少なくなり、代わりに主題に基づいた会話、討論、作文と、ニュースを利用した聞き取り練習などの比重が大きくなります。私のクラスの先生は毎日宿題をたくさん出す方で、留学当初は帰宅してから夜中の一時や二時ごろまで宿題をしていました。そうして翌日は寝不足のまま、朝九時から午後一時まで毎日四時間の韓国語授業を受けていました。そんなわけで午後からの大学の授業は、時間的にも精神的にも一日一コマが精一杯でした。ですから大学の授業を中心に時間割を組みたい方は、私のように語学堂の勉強に時間を割かなくてもすむように、事前に充分な語学力をつけて留学に望んだほうがよいと思います。しかし個人的には、そのような生活を送りながら、最終的に韓国語能力試験（TOPIK）の高級を受験できるほどに語学力が伸びたので、その成果に満足しています。その他にも、語学堂では留学生のための小旅行や行事も数多く行われ、語学以外にも様々な体験ができた、実りある留学生活だったと思います。

＊語学堂：韓国語を集中的に学習する語学センター



大学構内で語学堂のクラスメイトと



授業中の風景

大学情報

東国大学校は明洞や東大門の近くの、ソウルの中心部にあり、どこへ行くにも便利な環境にあります。学校や留学生寮のすぐ前に駅がありますから、交通の便もとてもよいです。ですが、大学そのものは山の麓に位置していて、キャンパス内はかなり起伏が激しく、毎日息を切らして通ったものです。大学の特徴は、仏教系の大学ですので、仏教学科があり、僧侶の方をキャンパスのあちらこちらで見かけるなど、独特の雰囲気があります。また、演劇学科も有名で、卒業後に歌手や俳優として現在活躍している方も大勢いるようです。

留学生寮がある忠武路という町はもともと映画街で、学校から寮へ帰る途中の大通り沿いに大きな映画館があります。私もよく休みの日や放課後に映画を見に行きました。この他にも近隣の明洞や東大門といったところを含めると、学校周辺は娯楽が多いので、休日の過ごし方には苦労しないと思います。勉強ももちろん大変ですが、勉強もそれ以外のことも、あらゆる面で充実した留学生活が送れることと思います。

交換留学について詳しく知りたい方は、「九大生のための海外留学情報」（http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/study/）をご覧ください。過去の交換留学生による報告書も大学毎にたくさん掲載しています。

こんな本出しました

九大アジア叢書―7

書名 **昆虫たちのアジア**

編著者：緒方一夫・矢田　脩・多田内修・高木正見

発　行：九州大学出版会（平成18年3月刊）



著者から一言

多様な自然と未知の虫たちという組み合わせは、私たち昆虫学者をアジアに惹きつけています。この本では、アジアの昆虫たちの多様性、彼らが辿った進化、そしてアジアで暮らす人々とのかかわりについて、チョウ、ハナバチ、アリ、ゾウムシ、害虫とその天敵による防除、昆虫利用文化と六つのエピソードで紹介してます。アジアの自然史入門の書としてもハンディな一冊です。

編集後記

日本格付研究所による財務格付けにおいて、九州大学が他大学に先駆けて初めてAAAを獲得した。これまでの様々な革新的取り組みの成果として誠に喜ばしい。しかし、長期的な発展には、それを支える教職員の心身両面での健康が不可欠である。私見であるが、独法化以降最も多忙になったのは、健康科学センター健康管理部門の教職員ではないかと思う。法律で定められた産業医の業務が新たに加わり、健康不全者の増加も相まって仕事量がほぼ倍増している。現在一名しかいない常勤カウンセラーも、過重労働を強いられている。このような健康管理スタッフの役割や責任の増大に対して、未だに全学管理人員として扱われている身分や業務の評価が不充分であることは否めず、企業とは雲泥の差がある。九州大学が長期的発展を築くには、教職員の更なる健康確保措置やそのための体制作りへの投資が必要である。

広報誌編集部会主幹・教授　入江　正洋

阿蘇のカルデラにある高校を訪れた時に考えた。そこの生徒たちにとっては、外輪山を越えて熊本大学へ出かけるのさえ結構な大事だ。九大にいる私が「いつでもいらっしゃい」なんて気安く言えたものではない。大学生や大学教授と日々すれ違ったりしている街の高校生とは、大学に対してもつイメージや親近感が異なるだろうし、ひょっとすると、そのせいで進学動機や学力まで差がつくのかもしれない。学生集めというよりも純粋に教育的な意味で、何かをしたいような気になった。

編集委員・講師　渡辺　哲司

今私は九州大学百周年記念事業の準備、学内募金、学外支援組織の拡充等で走り回っています。しかし、全国の主要企業、団体に協力依頼に行くと、必ず「数多くの大学がある中でなぜ九州大学だけに？」と言われます。いかに九大の活動が世の中に知られていないかを思い知らされました。そして戦略的な広報の必要性を再認識させられました。大事なのは誇るべき九大の教育研究、産学連携・地域連携、国際交流の実績等を積極的に情報発信していくことです。そして、それをインパクトのあるものにする為には、それが世界の一流大学に勝るとも劣らないものであることを証明することです。そして九大が法人化後の難局を乗り切り、真のアジアの大学のリーダーとなる為には、百周年記念事業を成功させ、九大を国内外にアピールし、九大ブランドを確立することです。その為には学内教職員の皆様のご支援、ご協力が不可欠です。学内募金ともどもご協力宜しくお願いします。

総務部長（広報部長）　松本　次好

お詫びと訂正

前号（第五十号）の三十七ページに記載した『こんな本出しました』に、「発行　ミドリ印刷」とありますが、正しくは「発行　九州大学ローンテニスクラブ・九州大学硬式庭球部」です。お詫びして訂正します。

九大の最新情報は「九大広報」の定期購読で。

九州大学同窓会連合会では、九州大学の姿をご理解いただくため、同窓生や在学生のご家族の皆様をはじめ、広く一般の方々にも「九大広報」の定期購読をお願いしています。定期購読は一年間六巻分（隔月発行）三千円でお受けいたしておりますので、ご希望の方は、同窓会連合会事務局までご連絡をお願いします。

九州大学同窓会連合会事務局
TEL.092-642-4328　FAX.092-642-2113
E-Mail alum.uok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

本誌は、九州大学が発行する『九大広報』を九州大学広報委員会の承認を得て、九州大学同窓会連合会が増刷りしました。